

モダニズム建築の保存における歴史的価値

—東京中央郵便局を事例として—

榎木佑介（法学部政治学科3年）

指導教員：伊藤行雄

論文要旨

近年、モダニズム建築の保存をめぐる議論となる事例が増えている。しかしながら、モダニズム建築は、築年数が浅いために評価が安定せず、また、様式主義建築のように意匠を理解されない傾向にあって、保存に至ることは困難を伴う。

過去に多くのモダニズム建築が解体されてきたが、保存運動が存在しなかったわけではない。日本建築学会が提出した保存要望書をもとに保存上の価値を整理すると、モダニズム建築の場合、歴史的価値と文化的価値の主張だけでなく、社会的価値についても言及されることが多い。社会的価値は、景観、環境、まちづくりや公共性への貢献といった要素を含み、現代社会で実際に使用されているモダニズム建築の保存では大きな役割を果たすことを指摘した。しかしながら、特に景観上の価値からの保存要望は、外壁部分のみの保存や再現といった妥協的な保存形態に落ち着いてしまう事例が多いことも明らかになった。

本研究では、以上の事柄をより詳細に検討するために、東京中央郵便局庁舎をめぐる保存問題を具体的な事例として取り上げて考察を行った。同庁舎は、我が国の初期モダニズム建築の代表作として認められてきたのにも関わらず全面的な保存がなされなかった。実際の保存運動を振り返ると、「東京中央郵便局」という建築が保存上の価値において我が国の建築史に与えた影響以上に、東京駅前広場や丸の内地区の「景観」に重きが置かれていたことが明らかになった。

以上のことから、モダニズム建築の保存における景観上の価値は少なくとも部分保存・再現という観点においては有効であると言えよう。一方で、従来重視されてきた歴史的価値、なかでも建築史的価値の有効性は低くなり、全面的な保存に至ることは困難になったと考えられる。

なお、本研究は共同研究「都市と施設」の一部である。